

(5) 栃木県鹿沼市の唐沢(からさわ)鉱山跡－追記

10数年ぶりに現地を訪問した。これもGPSのガーミンによる経路ログの取得と、現地の現状の確認が主たる目的であった。現地へのアクセス、及び現地付近は昔とほぼ変わりはない。が、良い標本の採集は、もう簡単な表面観察だけでは難しいかもしれない。じっくり時間をかけ、根気よく観察する必要がある。ズリ跡と思われる箇所、表面を少し掘り込むのが良いかもしれない。

ところで、参考文献(1)から唐沢鉱山の鉱山図を入手していた。後掲している図5である。この鉱山図を、既報の現地図と比較してみると、Bの位置は入手した鉱山図の露頭鉱脈位置と一致しているが、Aの位置には、全く露頭鉱脈が無いことに気がついた。鉱山図をよく見ると、現地図中のAでもBでも無い、他の何カ所かに幾つもの露頭鉱脈が記載されている。とすれば、是非とも、これらの露頭鉱脈のところの探査をする必要がある。「先人」が手を加えた跡があるに違いないと考えたのである。

今回、数回にわたった現地近傍の探査結果を報告する。結果であるが、露頭鉱脈のところには期待した鉱山跡らしい徴候は何も確認できなかった。探査力不足か。興味を持った読者は、本稿を手引きの1つとして現地を訪問してはどうか。

2021年3月



図1 鹿沼市の中心あたりから、164号に入り、北上し、その後、149号に入り西行していく。唐沢地区で、右手にある林道に入って、北上して行く。赤輪の所が既報の現地、A点とB点である。なを、青色曲線は数回にわたるガーミンによる経路ログの重ね書きであることに留意すること。

図2 図1の部分拡大図。唐沢地区のC点で右折し、民家に挟まれている入口が窮屈な林道に入って北上して行く。林業業者が稼働していなければ、小型車でもズッと奥まで車で進行できよう。行けなければ、その手前付近で、邪魔にならない場所に車を止めて、歩こう。林道は現地付近まで幅広く平坦である。既報で記述している坑口はA点とB点の2カ所である。探査の追記に当たって、何カ所もの沢を探査した。G、H、I、J点である。

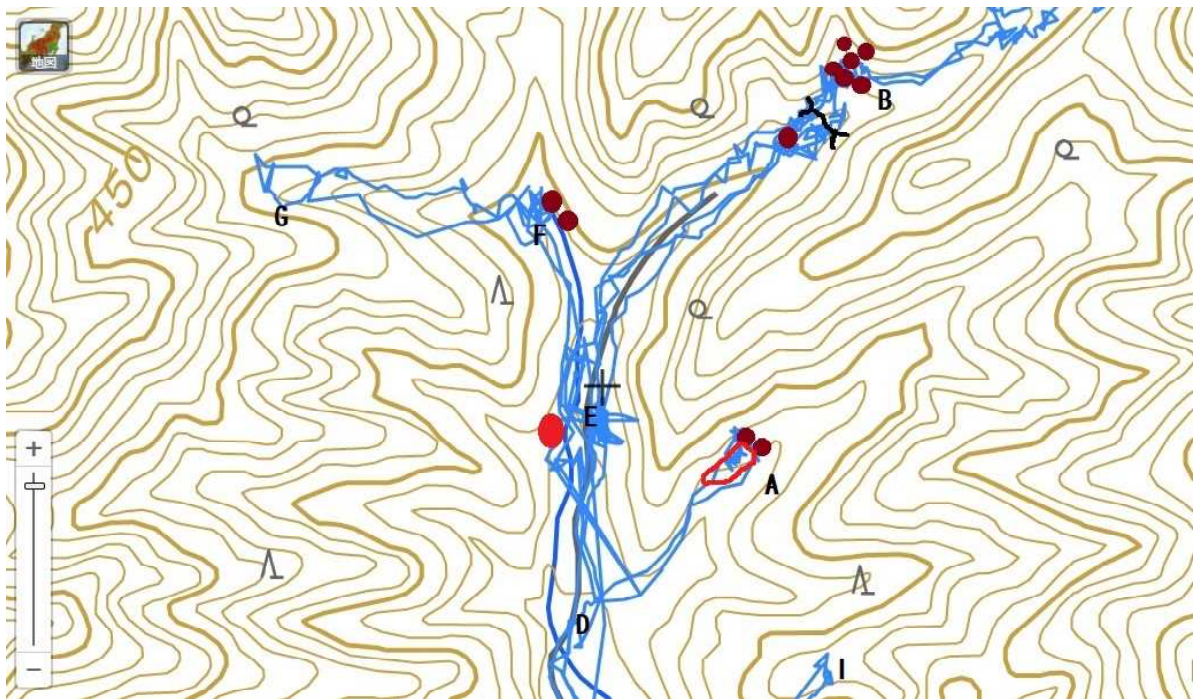
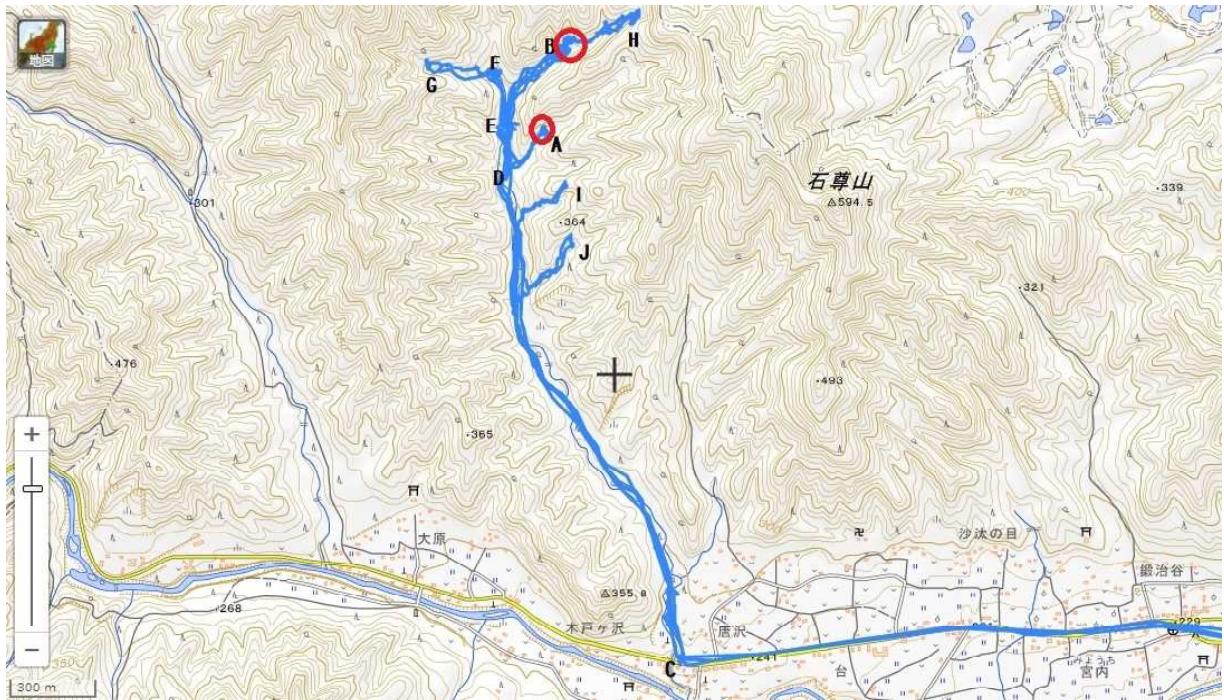


図3 図2の拡大図。D点は結構広い川原場である。このあたりに車を自由に駐車できる。その先で林道は分岐し、右側はA点方向へ、左側はB点方向の林道となっている。沢の右岸となる現場のA点の所の赤輪はプラトーを、茶色丸は坑口跡を示している。E点の北向き前方当たりで沢は分岐している。B点へは、向かって、右側の沢に沿って進んで行く。沢の右岸に辛くも消えかかっている道はある。この沢には多数の砂防ダムがある。B点付近にも砂防ダムがあり、その手前、右岸の沢水準に立派な坑口跡がある。茶色丸の所。砂防ダムの上に出ると、左手に小沢がある。この小沢に向かって右上部に、プラトーがあり、坑口跡が「密集」して多数現存している。D点からE点に向かって進んでいると、沢の対岸の左手奥にコンクリートの基台を見つけた。赤丸の所である。洗鉤施設跡と思われる。更に上流のF点付近で、沢の左岸の沢床水準に連続した2つの坑口跡を確認した。茶色丸である。ともに奥行きがあまりないので、試掘坑と判断したが？

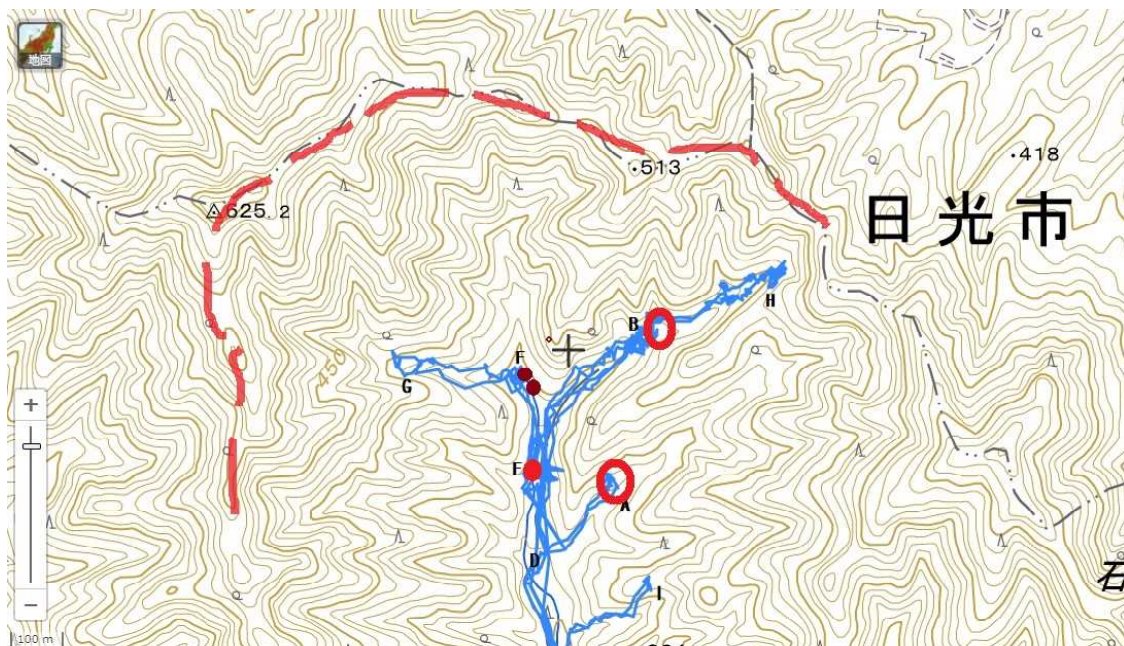


図4 探査結果を現在の地形図に描いたこの図を、参考文献(1)の唐沢鉱山の鉱山図(次の図5)と対比させてみる。北回りの稜線、A点B点の位置、各沢の位置の対応関係が見いだせる。これらにより、G点へ、H点へ、I点へと探査を広げた。

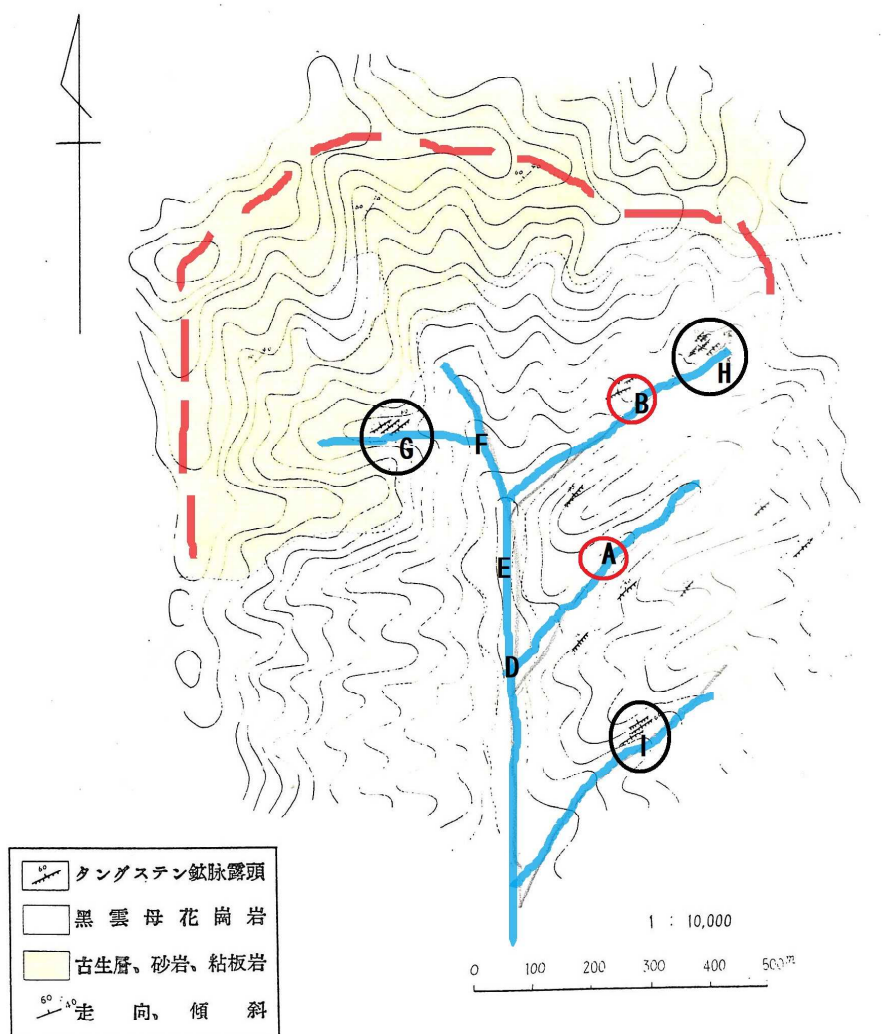


図5 参考文献(1)からの唐沢鉱山の鉱山図。図4との対比を行っている。赤輪のA点、B点が確定できたものとして、各沢を水色の曲線書き入れている。黒輪のG点、H点、I点、J点(図2参照)近傍の探査を行った。が、全く成果はなかった。

鉱山跡写真 A点とB点への探査経路



写真1 149号を西行して来た。唐沢地区のC点である。前方は小来川方向となる。手前で十分に減速し、赤矢印のように右折し、林道に入っていく。入口の両側に民家が迫っている。窮屈に見えるのはここだけである。



写真2 D点付近。ここまでは小型車でも大丈夫である。車を駐車できる適当な「広場」である。赤矢印のように前方の沢に進むとA点に行き着く。赤線のように途中で左折するとB点方向へ。



写真3 D点からA点に向かって、林道を歩いてきた。A点近傍で、林道から沢の右岸を見上げるとプラト一部が確認できる。赤輪の所。一帯はズリである。



写真4 プラト一部に登る。前方に埋もれかかっている坑口跡が見えている。赤輪の所。左上の坑口跡は半分埋もれかかっていたが、その右下の坑口跡は完全に埋もれていた。坑口跡らしいと思うが、？である。プラト一帯ズリである。



写真5 写真4で示した左側の赤輪に近接しての一葉。落ち葉で坑口前が埋められている。完全に埋められるのはそれほど先のことではなさそうである。



写真6 その坑口から内部を覗く。確りしている。



写真7 林道をB点に向かって進んできた途中のE点より少し先の所である。右前方に砂防ダムが見えている。右側の沢の方に進んで行く。2本の矢印で示しているが、どちらでも良い。なを、左手にある林道は図3の地形図には記されていないことに注意すること。オフロード車ならば、この先にも進んで行けよう。

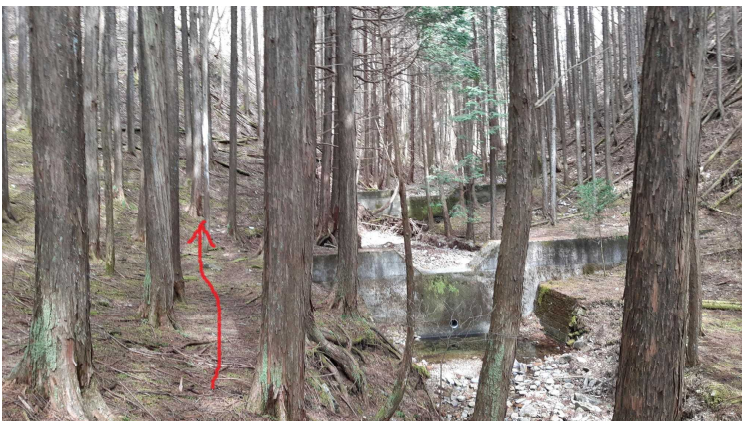


写真8 写真7に従って、右側の沢に入り、登って来た。沢には多数の砂防ダムがある。沢の右岸に消えかけている「林道」が残っている。赤矢印。それを進む。



写真 9 B点までの途中、沢の右岸、沢底水準にあった坑口跡。



写真 10 その内部の様子。

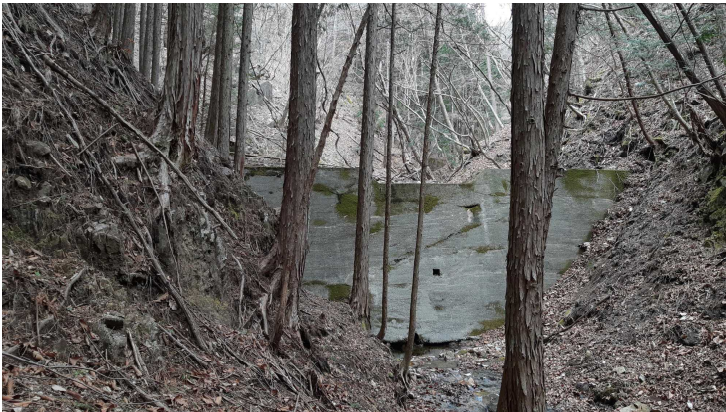


写真 11 前方の砂防ダムの上、左側の子沢の右側に多数の坑口跡がある。ここへは、この砂防ダムに向かって左側の林の中を巻いて登り上がれる。細い「獣道」がある。



写真 12 B点付近である。写真 11で示している砂防ダムの上に立っている。沢の上流に向かって左側の小さい沢を見上げている。赤輪付近にプラトーと多数の坑口跡がある。この当たり一帯ズリや転石があるが、良品を見つけるのにはじっくり時間をかける必要がある。



写真13 プラトーに立って、3連の坑口跡を見ている。この上にも幾つかの坑口がある。



写真14 その一番左側の坑口の内部の様子。

G点、H点、I点の探査では何ら鉱山跡らしい痕跡は確認できなかった。全くの空振りであった。がE点に洗鉱施設跡と思われるコンクリート基台、F点付近に坑口跡を確認した。



写真15 E点付近の林道から、沢の右岸を見ている。赤丸の所にコンクリート基台を確認。



写真16 それに近接して、施設前方から見上げている。



写真 1 7 F 点付近。沢の左岸、沢底水準に連続した坑口跡。赤丸 2 つ。



写真 1 8 その坑口跡の 1 つの内部の一葉。

採集鉱物写真



写真 1 9 中央の黒い部分が、石英の母岩中に成長した鉄マンガン重石。
B 点の砂防ダム下の坑口跡当たりで表面採集で見つけた物。

参考文献

- (1) 「地下資源調査報告書 第 2 号」、栃木県、昭和 2 8 年？

(5) 唐沢(からさわ)鉾山跡

板荷鉾山と黒川を挟んで、北側の対面あたりにあり、自然蒼鉛を主産鉾物としていた鉾山らしい。参考文献(1)の案内はやはり古い。国土地理院の2万5千分の1の地図を参考にすると良い。鹿沼→板荷と国道を進んできて、唐沢地区で左折し(この左折道は細い)、黒川を渡ると板荷鉾山に行ける(板荷鉾山跡の項を参照)。唐沢鉾山には、左折をせず、そのまま数十m直進する。この辺りの道路の右に、民家に近接して、北に向かっている車1台がようやく通れる程度の細い道がある。民家への道のようなものである。が立派な公道林道である。地図には実線で、この道が記入されている。地形図では林道は一本道として記入されているが、現在では林道は複雑に枝分かれしていることに注意。この事情は他の鉾山跡の場合にも当てはまるので、探査では頭の中に入れておいた方がよい。この林道を沢に沿って、北北西方向に進んでいけばよい。途中にあるらしい採石場跡らしいものは、現在では全くわからない。入り口より約1.5kmの所で道は2又に分かれている。右の道は平坦で沢に沿い、左の道は急坂となっている。右の道へ進む。100m前後で、平坦な沢にでる。下流側に砂防ダムがあり、土砂が堆積して出来た平坦地となっていることがわかる。車を駐車させることも出来る。この地点が参考文献(1)での林道終点らしい。勿論、当時のである。目の前で、林道が2又に分かれている(写真)。右へ行けば参考文献(1)のズリA、左に行けば、ズリBへ行ける。ズリAに行こう。2又地点から右の林道を進んでいく。林道の右側は沢である。林道の左斜面を注視しながら進んでいくと、斜面が部分的に平らになっている箇所がある。2又地点から100m~200mぐらいか。ここがズリAである。テラス部分に登ると。右斜面に廃坑があり、鉾山跡であることが確認できよう(写真)。

ズリBへ行こう。2又に戻り、左側の林道を進んでいく。沢は林道の左側となついる。進んでいくと、沢を渡り、沢は林道の右側となる。このあたりに車を止めることも出来る。先に進んでいくと、右側の沢が平坦になり、沢に簡単に行ける所に達する。この辺りで、2つの沢が合流している。林道は、先に進んでいるが、この箇所、沢に降りる。右側の沢の上流にズリBがある。沢の左斜面に踏み跡も消えかかっている道がある。先に進むと、途中で小さくはない滝がある(写真)。参考文献(3)に、この滝が記載されている。更に先に進むと、左からの沢に出会う。この沢の対面がズリBである。ズリの上には幾つもの抗口がある(写真)。

ズリAでも、ズリBでもめぼしい成果はなかった。が、ズリにじっくり顔を近づけて、時間をかけて探せば、小さい鉾物は幾らでも探せよう。



下の赤丸がズリA点、上の赤丸がズリB点。林道は現在多岐にわたっている。

地図 国土地理院2万5千分の1地形図「文挟」

探査日 2009年 3月、その他の日

参考文献

(1)「鉾物採集の旅ー1 東京周辺をたずねて」加藤昭、松原聡、築地書店、1982年

鉾山跡写真



前方がズリ A への林道。左に曲がるとズリ B へ。



ズリ A の上で坑口跡を撮影。



数mの滝の先に砂防ダムがある。その先の左側がズリ B。



ズリ B の上部にある坑口跡

採集鉱物写真

採集鉱物	自然蒼鉛 (Bismuth ビスマス)
化学組成	Bi S_2
色	銀白色
光沢	銀
条痕色	灰
比重	9.8
硬度	2 結構柔らかい
結晶系	六方晶系
劈開	四方向に完全
共生鉱物	石英など
解説	

(1) 薄板が積層した形状であり、顕微鏡で見ると、正方形形状劈開面が見えるので、自然蒼鉛と見た。
それにしてもあまりに小さい試料であり、残念。
(2) ビスマス (Bi) の主要鉱物である。



赤丸の中当りに微小な自然蒼鉛があった。

品名	輝水鉛鉱 (Molybdenite モリブデナイト)
化学組成	MoS_2
色	銀白色
光沢	銀
条痕色	黒、灰
比重	4.8
硬度	1.5 結構柔らかい
結晶系	六方晶系
劈開	一方向に完全
共生鉱物	石英、鉄マンガン重石、黄鉄鉱など

解説

(1) 板状、薄状であり、顕微鏡で見ると、少し六角の部分が見え、かつ柔らかそうなので、輝水鉛鉱と見た。大鷲鉱山跡の輝水鉛鉱を持っている。小さいながらそっくりである。それにしてもあまりに小さい試料であり、残念いつか大きな物を採集しよう。



これも赤丸の中当りに微小な輝水鉛鉱があった。